

貴志康一生誕100周年記念 — 中嶋彰子が奏でる豊穡な音の海

貴志 康一 Koichi Kishi (1909–1937年)



中山岩太 撮影
(貴志関係の写真はいずれも「甲南学園 貴志康一記念室資料」から)



ベルリンフィルを指揮する貴志(1934年)

昭和初期に作曲家・指揮者として活躍した夭折の天才音楽家。大阪の富裕な商家に生まれ、兵庫県芦屋市の甲南高校在学中に、ヴァイオリニストを目指してジュネーブ国立音楽学校に留学。その後、ベルリンでヒンデミットに作曲、フルトベングラーに指揮法を学ぶ。1934年ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団を指揮して自作の管弦楽曲「日本スケッチ」などを初演。翌年にもベルリン・フィルを指揮し、自作歌曲「かごかき」「日本スケッチ」などをレコード制作のために録音した。同年に大阪と東京で帰朝記念演奏会を開き、注目される。その後も精力的に作曲家・指揮者として活躍するが、心臓麻痺のため28歳の若さで悲劇的な死を遂げた。貴志の活躍は、その後の日中戦争や太平洋戦争、敗戦後の混乱で忘れられていたが、近年埋もれていた多くの作品が発掘され、演奏されるようになってきた。

短い生涯ながら、貴志は多くの秀作を残している。管弦楽曲「日本組曲」、交響曲「仏陀」、「ヴァイオリン協奏曲」、歌曲「赤いかんざし」「八重桜」、バレエ曲「天の岩戸」、オペレッタ「なみ子」など。懐かしい日本情緒のなかに、いま聴いてもハッとさせられるような斬新な響きがあり、そのみずみずしい感性は色あせることなく高い評価を得ている。

ソプラノ 中嶋 彰子 Akiko Nakajima



© K. Miura

貴志の世界に魅せられているオペラ歌手。北海道で生まれ、15歳で渡豪。シドニーで音楽教育を受ける。1990年全豪オペラ・コンクール優勝。『皇帝ティートの慈悲』のセルヴィリアでデビュー。93年以降、活動拠点を欧州に移す。99年にダルムシュタット・オペラ『ルチア』でのセンセーショナルなルチア役によりドイツ有数のオペラ誌「オペルンベルト」の年間最優秀新人賞に選ばれた。同年ウィーン・フォルクスオーパーの専属歌手になり、劇場のトップスターとして活躍。卓越した歌唱と演技力、自由で華やかな存在感をみせ、圧倒的な人気を得る。さらに、この99年にはNHK交響楽団のフォーレ「レクイエム」(シャルル・デュトワ指揮)で日本デビューを果たした。2002年『ウェルテル』ソフィー役で新国立劇場にデビュー。08年オーストリア・シュタイヤー音楽祭で『蝶々夫人』のタイトルロール・デビューを行い、その成熟したリリコ・ソプラノによる伸びやかな表現は「可憐で誇張のない演技」など批評家からも高い評価を得た。04年出光音楽賞を受賞、受賞者ガラコンサートにおいて貴志康一の歌曲『赤いかんざし』などを披露した。

ピアノ 松本 和将 Kazumasa Matsumoto



1998年、第67回日本音楽コンクールに優勝し、併せて増沢賞はじめ全賞を受賞。各地でのソロリサイタルをはじめ、これまでブラハフィル、読売日響、日本フィル、新日本フィル、東京交響楽団、岡山フィル、関西フィル、倉敷音楽祭祝祭管弦楽団他多くのオーケストラと協演。現在ベルリン芸術大学大学院 (Hochschuleder Kuenste, Berlin) にてバスカル・ドヴァイヨンに師事。

アルバム・ピアージェ

ピアージェ (1810–76年) は、ヴェルディに「リゴレット」や「椿姫」などの台本を提供したイタリアのオペラ台本作家。1867年、脳卒中で倒れたピアージェを支援するために、ヴェルディは友人の作曲家らと歌曲集を出版、その印税を寄贈した。この歌曲集のことを「アルバム・ピアージェ」という。カニョーニやオベール、リッチらが参加した。最近、中嶋彰子がリリースしたCDで、このピアージェ歌曲集を世界初録音した。